

# あの遺跡は今！16



平成25年2月17日(日)

公益財団法人滋賀県文化財保護協会  
滋 賀 県 教 育 委 員 会

## 整理調査成果報告会について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会は、県内各地の埋蔵文化財の発掘・整理調査を行っています。発掘調査で得られた情報は、「現地説明会」や「新聞やテレビの報道」などを通じていち早く公表しています。また、滋賀県立安土城考古博物館内にある調査整理課では、整理調査の成果についてより深くご理解いただけるように、整理調査報告会「あの遺跡は今！」を平成17年度から毎年2回実施しています。「あの遺跡は今！」では、新たな資料や成果を積極的に公開・展示するとともに、出土品に直接触れていただく整理作業体験などを行っています。

今回は、メインテーマを『山の営み・湖の営み』とし、山（内陸）で営まれた遺跡と琵琶湖にかかわる遺跡をとりあげ、それぞれの地域での人々の生活を出土遺物を通じ、さらにきめ細かくお伝えするために調査報告会を企画いたしました。

この企画が、滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみをお持ちいただくきっかけになれば幸いです。

---

### 目次

---

#### ◇関連年表(1)

- ◇成果報告 「山に営まれた墳墓と祭祀場」宇佐山古墳群(2～5)
- ◇展示解説 「何だと思いませんか？ちょっと“きもかわいい”意匠」岡山城遺跡(6)
- ◇展示解説 「平安時代の水田開拓」蛭子田遺跡(7)
- ◇展示解説 「曲物容器の保存処理」保存処理（蛭子田遺跡）(8)
- ◇成果報告 「南湖の湖底・湖岸遺跡」北萱遺跡・粟津湖底遺跡(9～12)
- ◇展示解説 「じつは都風、雅なうつわの数々」六反田遺跡(13)
- ◇展示解説 「湖に浮かぶ信仰の島」多景島湖底遺跡(14)
- ◇特別報告 「馬を運んだ港」塩津港遺跡(15～18)
- ◇展示解説 「まつり！ マツリ！ 祭祀 水に願いを込めて」上御殿遺跡(19)

#### 報告会

時間：午後1時～午後3時30分（開場12時30分）

場所：博物館2階セミナールーム

あいさつ：午後1時

成果報告1：午後1時05分～

成果報告2：午後1時50分～

特別報告：午後2時35分～

# 関連年表

時代	主な出来事		
縄文時代		約 2500 年前	稲作始まる
弥生時代	3 世紀	248 年頃	卑弥呼死す
	4 世紀		前方後円墳が築造される
古墳時代	5 世紀		仁徳天皇陵が築かれる
	6 世紀		群集墳が盛行する
	7 世紀	603 年	冠位十二階制定
飛鳥時代		645 年	大化の改新（乙巳の変）
		667 年	近江大津宮へ遷都
奈良時代	8 世紀	710 年	平城京へ遷都
		742 年	紫香楽宮の造営
		752 年	東大寺の大仏が完成
		794 年	平安京へ遷都
平安時代	9 世紀	894 年	遣唐使が中止となる
	10 世紀	935 年	平将門の乱起こる
	11 世紀	1051 年	前九年の役起こる
	12 世紀	1192 年	源頼朝、征夷大将軍となる
鎌倉時代	13 世紀	1274 年	元寇
		1281 年	
室町時代	15 世紀	1336 年	室町幕府成立
		1479 年	蓮如、山科本願寺を建立
安土・桃山時代	16 世紀	1508 年	足利義澄京都から没落
		1573 年	足利義昭追放（室町幕府滅亡）
		1576 年	安土城完成
江戸時代	17 世紀	1600 年	関ヶ原の戦
		1767 年	田沼意次側用人となる

粟津湖底遺跡

北菅遺跡

多景島湖底遺跡

宇佐山古墳群

上御殿遺跡

岡山城遺跡

六反田遺跡

蛭子田遺跡

塩津港遺跡

岡山城遺跡



# 山に営まれた墳墓と祭祀場

## うさやま 宇佐山古墳群 (大津市神宮町)

宇佐山古墳群は、近江神宮が鎮座する宇佐山の東南麓斜面にあります。古墳時代後期の群集墳として知られていましたが、発掘調査では、弥生時代中期の竪穴住居や弥生時代後期～古墳時代前期の周溝墓、古墳時代中期の方墳、奈良時代の祭祀場、平安時代の火葬墓など、さまざまな時代と種類の遺構が見つかりました。

### 弥生時代後期～古墳時代前期の墳墓



9号墓 (円形、弥生時代後期後葉、2世紀)



9号墓出土弥生土器



8号墓 (方形、弥生時代終末、3世紀前半)



8号墓木棺 (副葬された鉄槍と棺の上に置かれた石)



8号墓出土土器

・弥生時代終末期の8号墓は、近くの平地部ににしこおりある錦織遺跡の周溝墓よりも規模が大きく、鉄槍を副葬しています。古墳時代前期の10号墓も同様の規模をもつことから、集団のなかでもより有力な人物が湖と平野を見下ろす山手に墓を営んだと考えられます。

## 古墳時代人との対面

13号墳は、古墳時代中期（5世紀前葉）に築造された20×14mの規模の方墳で、箱式石棺が使用されています。石棺の中には、被葬者の頭蓋骨が奇跡的に遺存していました。魔除けのため、石棺の内面にはベンガラ（酸化鉄）、遺体の前頭部には朱（硫化水銀）が塗られていました。石棺の外に鉄刀・鉄鏃・鉄斧・鉞（やりがんな）？・砥石が副葬されていました。



粘土にくるまれた石棺



石棺出土状況



棺蓋を開けた状態（土に埋まっていなかった頭部のみ、骨が残っていました）



被葬者は、40～60歳くらいの男性と推定されます。身長は158cm以下で小柄なひとだったようです。



赤く染まった頭蓋骨  
（額を中心に水銀朱が塗られていました。顔料が施されたのが肉付きの状態か骨化後かは不明です）

- ・13号墳に葬られた人物は、首長に次ぐクラスの人物であったと考えられます。
- ・箱式石棺は、日本海側の北近畿地域に集中する墓制で、滋賀県では湖西地域に偏って存在することから、日本海側から湖西ルートで当地に伝わったと考えられます。

## 奈良時代の土馬祭祀

奈良時代中頃（8世紀中頃）の祭祀場では、火を焚いた穴のまわりから、祀りに使われた土馬やミニチュアカマド、土器類が出土しました。

土馬は雨乞いや長雨止めなど水神の祀り、また、疫病神封じの祀りに使われたと考えられています。

宇佐山古墳群から出土した土馬は、裸馬でスリムな体に三日月形の頭をもつ、都で使われたタイプ（都城型）のものです。このタイプの土馬は地方ではあまり使用されないものですが、滋賀県内では旧滋賀郡と旧栗太郡を中心に20点ほど出土しています。奈良時代中頃、調査地内を流れる柳川支流を対象として都ふうの祀りが行われたと考えられます。



祭祀遺物出土状況（4×5mほどの範囲から集中して出土しました）



土馬出土状況（意図的に割って重ね置かれていました）



祭祀遺物（土馬は6体分以上あり、壊されてバラバラになった状態で出土しました。土器には小型の壺、杯、皿、煮炊きに用いる甕があります）



出土した都城型土馬

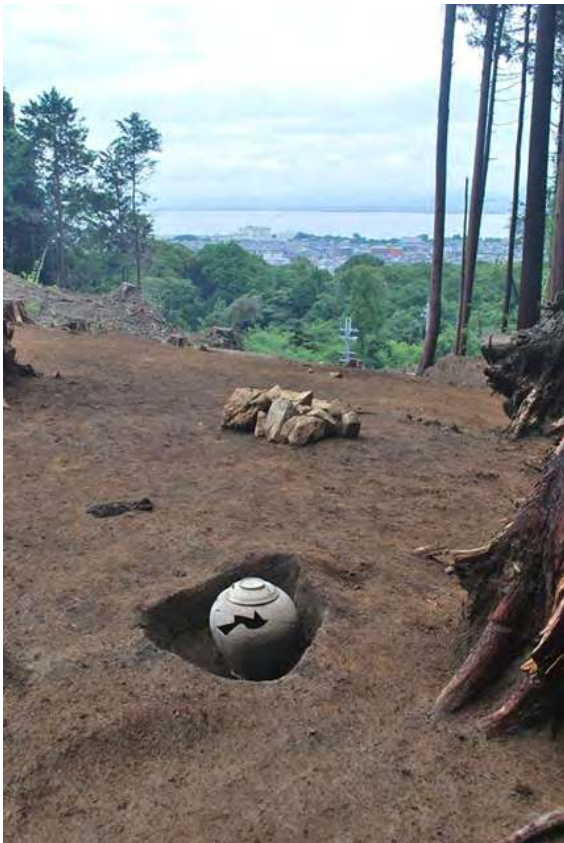


参考：在りタイプの土馬  
（大津市大伴遺跡出土品）

## 平安時代の火葬墓

蔵骨器は須恵器壺の頸を欠き取って身とし、京都で焼かれた緑釉陶器の皿を蓋に転用しています。蔵骨器の中には、火葬された遺骨が残っていました。骨を鑑定したところ、40～70歳代の年齢で非常に頑健で骨太な男性とわかりました。火葬墓がつくられたのは蔵骨器の年代観から9世紀末と考えられます。また、蔵骨器の近くには、墓標もしくは供養塔かとみられる石組がつくられていました。

宇佐山の周辺では奈良・平安時代の火葬墓が4例見つかっています。当時、火葬墓を営むことができたのは、官人（役人）や僧侶など一部の階層に限られていました。古代滋賀郡の郡役所の役人層が宇佐山周辺を墓域としていた可能性があります。



眺望の優れた地に火葬墓が営まれています



蔵骨器検出状況（中に火葬骨が残っていました）



火葬墓近くの石組遺構  
（墓標あるいは供養塔か）



接合・復元した蔵骨器



## 何だと思いませんか？ ちょっと「きもかわいい”意匠

おかやまじょう

### 岡山城遺跡（近江八幡市牧）

日野川と白鳥川に挟まれた湖岸に岡山と呼ばれる独立した小さな丘陵があり、その丘陵上に岡山城遺跡があります。遺跡の名称にもなっている岡山城は、南北朝の頃に佐々木六角氏が湖上警護の目的で岡山に支城を築いたことに始まります。室町幕府 11 代将軍義澄が死去したり 12 代将軍義晴が誕生した城として著名です。

発掘調査では、城の遺構とは別に古墳時代後期（6 世紀後半）の古墳 2 基がみわかりました。岡山には 40 基以上の古墳が分布しています。みつかった古墳は、横穴式石室を主体部とし、玄室と呼ばれる遺体を置く部屋と羨道と呼ばれる通路の境の部分に段を持つ共通の特徴を持っています。玄室と羨道の境に段を持つ横穴式石室は、湖東地域一帯に分布しており、中でも愛荘町から甲良町にかけての地域に集中しています。また、調査でみつかった石室の 1 基からは装飾付壺が出土しています。壺の肩部と底部に人とも動物とも取れるちょっと奇妙な「きもかわいい」装飾があります。このような須恵器に人物・動物を装飾した例は県内では大津市の袋 1 号墳、甲良町の塚原 10 号墳・竜王町鏡山出土品にみられます。ともに渡来人の居住が認められる地域の古墳で、さらに塚原古墳群では石室の構造にも共通性がみられ、何らかのつながりが想定できそうです。



◆装飾付壺(左) 2号墳から出土しました。装飾されているモチーフは、「馬」「猿」「鹿」という説もあります。

◆2号墳横穴式石室(上) 羨道部から玄室部をみた写真で、写真中央の床面にみえている石材が、玄室と羨道の境に当たります。





# 平安時代の水田開拓

えびすだ  
蛭子田遺跡 (東近江市木村町)

古墳時代の蛭子田遺跡は、網目状に河川が流れ、周囲には竪穴住居や掘立柱建物が建っていました。ここに住んでいた人たちは、樹木を伐採し、製品として出荷することを生業としていたようです。河川は伐りだした原木を集め、さらに加工したものを出荷するために利用されていたのでしょう。しかし、これらの河川も飛鳥時代頃になると、河川が埋没したために、木材の流通がままならなくなり、この地を去らざるをえなかったようです。

そして平安時代になると、人々は再びこの地で活動を始めました。ただ、この時は家を建てて住んだわけではなく、水田としてこの一帯を再開発したのです。発掘調査では、水田の水路と考えられる溝が何本もみつかりました。溝の何本かは、埋まってしまった古墳時代の河川の縁を沿うようにみつかっています。埋まりきったとはいえ、平安時代になってもまだ湿地状であったため、水はけのために溝を掘ったのでしょう。

そしてこれらの溝からは、平安時代初頭頃から中頃の土器などが出土しています。なかには、墨書土器もあります。左の土器の文字は2文字ありますが、なんと読むかはっきりしません。右の土器は「依」と書かれています。下の写真の平安時代中頃の土器は、1本の溝からまとまって出土したものです。出土した土器の量も多いため、すぐ近くに集落があったのかもしれませんが。



墨書土器「□□」



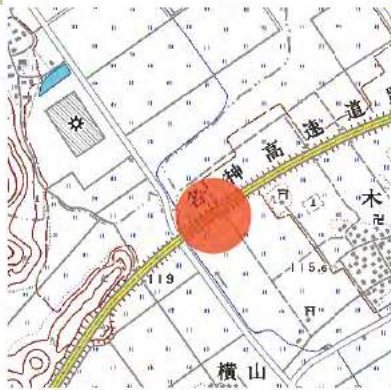
墨書土器「依」



古墳時代の河川と平安時代の溝



平安時代中頃の土器



## 曲物容器の保存処理

えびすだ  
蛭子田遺跡（東近江市木村町）

平成23年の発掘調査で古墳時代の川跡から出土した曲物（まげもの）容器の保存処理を実施しました。曲物容器は、長径54.5cm、短径27cm、高さ15.5cmを測る平面楕円形のもので、ほぼ完全な状態で、底板を上にした状態で出土しました。木質が脆くなっていたため、早急に現地で応急処置して取り上げ、その後、恒久的な保存処理を施しました。

発掘現場での取り上げの際には、曲物の周囲を医療用ギプス（スコッチキャスト・プラス-J）を用いて強化しました。これは、不織布に接着剤を含み、水で濡らすことで簡単にさまざまな形に強化することができるので、人体の治療用のほかに、こうした文化財の保存処理にも使っています。

取り上げ後は室内に搬入し、ギプスなどの梱包材料や土を取り除くクリーニングを行い、図面作成・写真撮影のあと保存処理を実施しました。処理方法は、人工樹脂のPEG（ポリエチレングリコール）を6か月かけて曲物容器に染み込ませて強化しました。



曲物容器の出土状況



発掘現場での取り上げ



樹脂含浸



保存処理完了



## 南湖の湖底・湖岸遺跡

きたがや あわづこてい  
北萱遺跡(草津市)・栗津湖底遺跡(大津市)ほか

琵琶湖周辺では、何らかの理由によって現在は水没してしまった遺跡＝水没遺跡を湖底・湖岸遺跡と呼び、伝承地も含めて約 120 か所の存在が知られています。これらの遺跡の多くは、琵琶湖総合開発事業に伴う発掘調査によってその存在と内容が明らかになりました。今回は、今年度末に整理調査が完了します南湖と称される琵琶湖南部地域の湖底・湖岸遺跡を取り上げ、その特性と水没要因について考えます。

### 1. 南湖における湖底・湖岸遺跡の分布状況と特性

南湖の湖底遺跡は、その立地条件から以下のようなグループ分けができます。

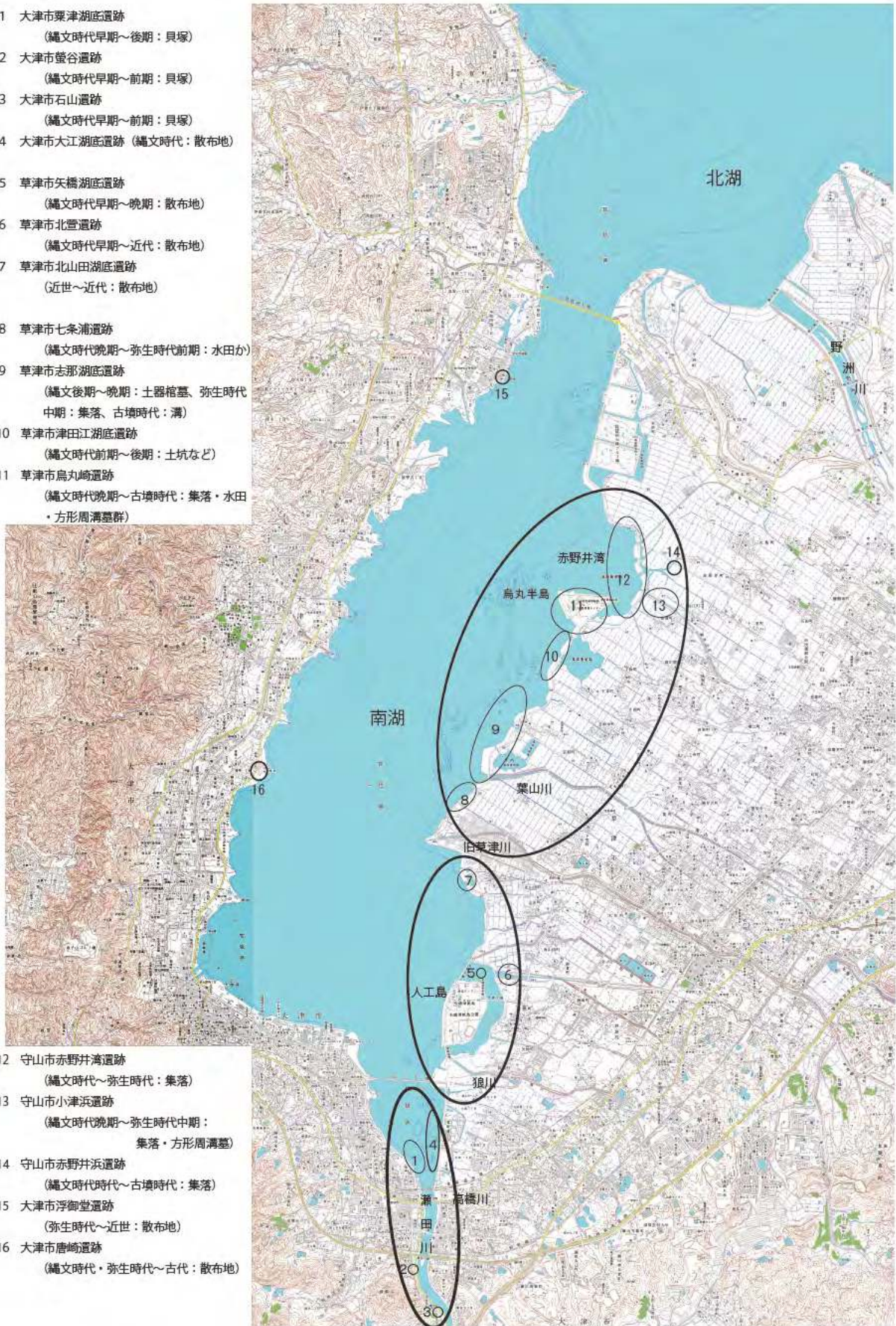
- ①西岸地域（大津市域）・・・三角州の発達が小さく湖底が急激に落ち込む
- ②東岸地域－ a：旧野洲川河口周辺・・・水没した三角州・湖底段丘が広がる  
－ b：旧草津川～高橋川・・・不安定な湖底段丘
- ③瀬田川流域・・・・・・・・旧瀬田川に面した微高地

そして、各グループには、次のような湖底・湖岸遺跡があります。

- ①：大津市浮御堂遺跡（散布地）・大津市唐崎遺跡（散布地）
- ②－ a：守山市赤野井湾遺跡（縄文時代早期末～古代・集石炉など）、守山市小津浜遺跡・草津市烏丸崎遺跡・草津市七条浦遺跡（縄文時代晩期～弥生時代：集落・水田・方形周溝墓）、草津市津田江湖底遺跡・志那湖底遺跡（縄文時代前期～晩期：土器棺墓、弥生時代集落）
- ②－ b：草津市北山田湖底遺跡（散布地）、草津市矢橋湖底遺跡・草津市北萱遺跡（縄文時代早期～近代・散布地）、草津市矢橋港跡（近世～近代・港湾跡）
- ③：大津市栗津湖底遺跡（縄文時代早期～中期：貝塚）、大津市蛍谷遺跡（縄文時代早期～前期：貝塚）、大津市石山遺跡（縄文時代早期～前期：貝塚）

現在の地形とほぼ変わらない西岸地域には、湖岸から日常生活の中で、あるいは祭祀・儀式に伴い湖中に投棄した遺物が堆積し包含層を形成していますが、東岸地域にみられるように、人々が生活・活動していた時期には陸化していたこと示す明確な遺構を伴う遺跡はありません。東岸地域においても、旧野洲川河口地域には縄文時代早期から古代の集落・墓・生産地などが営まれています。旧草津川河口以南ではやはり明確な遺構が見つかりません。最も特徴的な地域は、瀬田川流域

- 1 大津市粟津湖底遺跡  
(縄文時代早期～後期：貝塚)
- 2 大津市蟹谷遺跡  
(縄文時代早期～前期：貝塚)
- 3 大津市石山遺跡  
(縄文時代早期～前期：貝塚)
- 4 大津市大江湖底遺跡 (縄文時代：散布地)
- 5 草津市矢橋湖底遺跡  
(縄文時代早期～晩期：散布地)
- 6 草津市北登遺跡  
(縄文時代早期～近代：散布地)
- 7 草津市北山田湖底遺跡  
(近世～近代：散布地)
- 8 草津市七条浦遺跡  
(縄文時代晩期～弥生時代前期：水田か)
- 9 草津市志那湖底遺跡  
(縄文後期～晩期：土器棺墓、弥生時代  
中期：集落、古墳時代：溝)
- 10 草津市津田江湖底遺跡  
(縄文時代前期～後期：土坑など)
- 11 草津市烏丸崎遺跡  
(縄文時代晩期～古墳時代：集落・水田  
・方形周溝墓群)
- 12 守山市赤野井湾遺跡  
(縄文時代～弥生時代：集落)
- 13 守山市小津浜遺跡  
(縄文時代晩期～弥生時代中期：  
集落・方形周溝墓)
- 14 守山市赤野井浜遺跡  
(縄文時代時代～古墳時代：集落)
- 15 大津市浮御堂遺跡  
(弥生時代～近世：散布地)
- 16 大津市唐崎遺跡  
(縄文時代・弥生時代～古代：散布地)



第1図 南湖の湖底・湖岸遺跡

です。縄文時代早期前葉から前期・中期にかけて連続的に貝塚が形成されます。琵琶湖周辺では瀬田川流域にのみ大規模な貝塚が形成され、貝塚廃絶後には新たな遺構は営まれていません。

## 2. 南湖の湖底・湖岸遺跡の本来の姿

ここでは、旧野洲川河口と瀬田川流域の湖底・湖岸遺跡が、本来はどんな環境にあった遺跡だったのかを考えてみます。粟津貝塚は、旧瀬田川東岸に面した微高地上に立地していることが調査によって明らかになっています。また、赤野井湾遺跡では現在の湖岸線から約数百m沖合に縄文時代早期の集石遺構、志那湖底遺跡でも約数百m沖合に縄文時代後期の土器棺墓があります。それぞれの遺構がつくられた時期は水位がこれよりも低く、湖底の等深線図などを手掛かりにすると、当時の湖岸線はさらに3～4 km 程度沖合になります。現在は烏丸半島・赤野井湾があり複雑な地形となっている旧野洲川河口地域は、縄文時代には湖に面した環境ではなく、幾筋にも枝分かれした河川下流部に形成された三角州の微高地に集落や墓を築き、沼沢地を水田や狩場・猟場としていたと考えられます。そして、琵琶湖の南端部はより幅が狭くなり、粟津湖底遺跡は東岸から張り出した微高地、蛍谷遺跡・石山遺跡は旧瀬田川西岸に面した貝塚であったこととなります。

これに対し、明確な遺構のない地域は、陸化をしていないあるいは陸化することはあっても極めて不安定な土地条件であったと考えられます。旧草津川～高橋川の地域は、小さな河川が幾筋もありますが、野洲川のように大規模な三角州を形成するような河川はありません。そのため、沼沢地のような状況が続き、長期間にわたって陸化をすることはほとんどなかったようです。

## 3. 湖底・湖岸遺跡の形成—水没の原因—

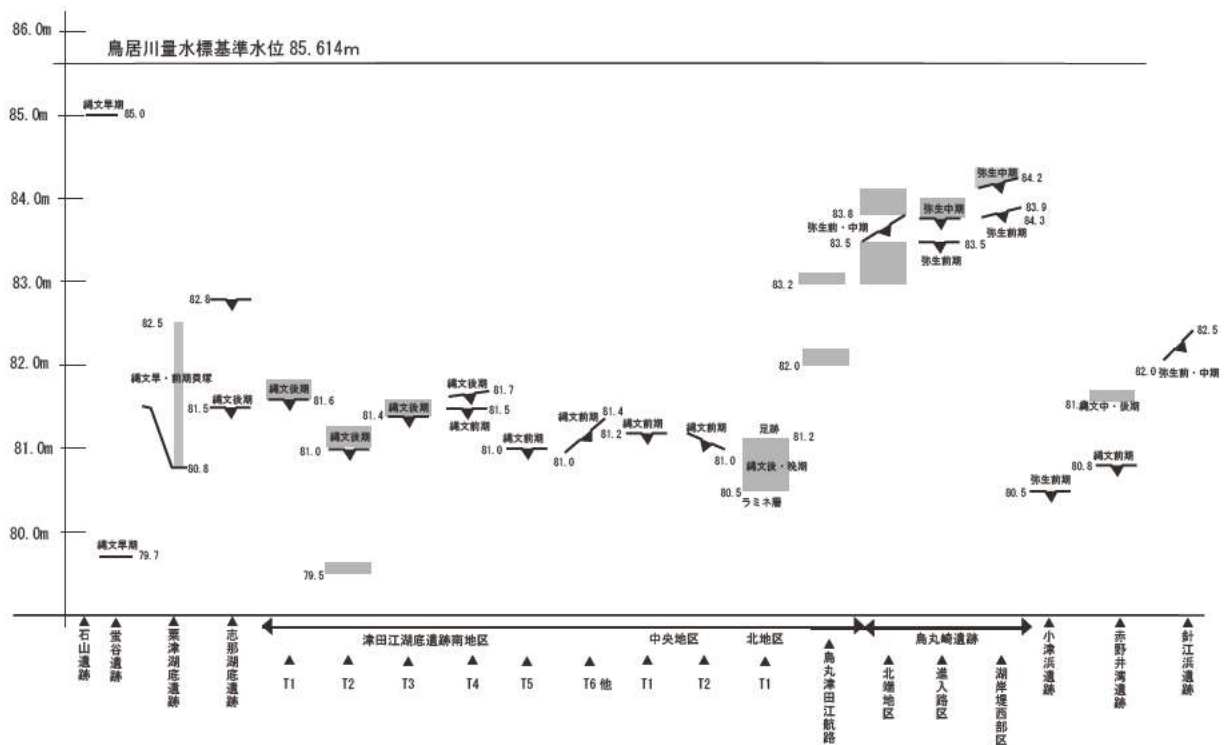
本来は、陸上にあった遺跡が、なぜ水没したのか？現象面のみをとらえれば、相対的に水位が上昇し、地盤が沈下したからということになります。では、なぜ水位は上昇し、地盤は沈下するのでしょうか。瀬田川に土砂が溜り琵琶湖全体の水位が上昇した、地震によって地盤が下がった、あるいは地滑りしたとよく言われますが、琵琶湖全体の動きとして西側が徐々に沈み込む造盆地運動なしに個別の要因のみを取り上げることは難しいでしょう。南湖の東岸に形成された旧の三角州は、この造盆地運動と大きな地震による地盤沈下により、湖底に水没し湖底段丘とよばれています。そして、赤野井湾遺跡をはじめとする湖底・湖岸遺跡はこの湖岸段丘上に立地しているのです。そして、いずれも、沖合いほど古く、湖岸に近づくほど新しい時代の遺構が築かれていることから、上下動はあるものの、縄文時代以来、徐々に

水位は上昇し古墳時代頃には、おおむね現在の湖岸線となります。

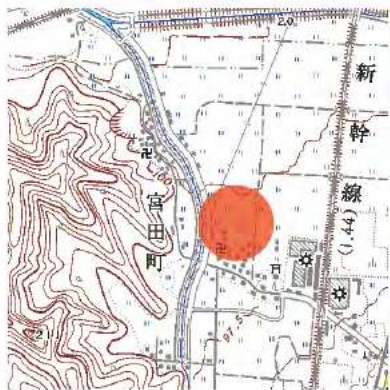
南湖東岸の湖底・湖岸遺跡における遺構の検出標高を比較すると、各時代の推定水位と大きく矛盾するものではありませんが、瀬田川流域では、栗津湖底遺跡と蛭谷遺跡・石山遺跡から導き出された縄文時代早期の水位には数mの差があります。栗津湖底遺跡で推定された水位では、石山遺跡は川岸からかなり高い位置になり、石山遺跡が水辺に近くなる水位では、栗津湖底遺跡は完全に水没してしまうのです。これは、単純に調査時点での遺跡の標高を基準とし比較したことによる矛盾であり、南湖が沈み込んでいるのに連動して瀬田川が隆起していることを考慮すれば、貝塚が形成された当時においては大きな矛盾はないと考えられます。

#### 4. 湖底・湖岸遺跡のとらえ方

旧野洲川河口地域に近似しているのは、北湖では姉川河口地域ですが、遺跡の密度としては高くありません。むしろ、北湖の特徴は数多くの内湖とこれに面した遺跡の密度が高い点にあるといえます。また、大地震に起因する地滑りで湖底に没した中近世のムラが数多くあることも特徴のひとつであり、より具体的に水没要因を追及した事例として注目されます。湖底・湖岸遺跡は、その水没要因を明らかにすることも重要ですが、実際に人々がその地で生活・活動した当時の立地環境・自然環境を復元し、その場の意味を考えることこそが重要であると考えます。



第2図 南湖の湖底・湖岸遺跡における遺構検出標高



# じつは都ふう、 雅なうつわの数々

## ろくたんだ 六反田遺跡 (彦根市宮田町)



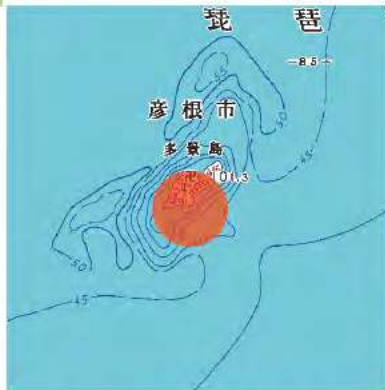
◆河道南から出土した土器群

六反田遺跡は、奈良時代後半（8世紀中頃）を中心とする港湾施設を備えた遺跡です。木簡をはじめ、土馬や斎串、人形代などの祭祀具のような特殊な遺物が出土しています。そして、一見、地味ですが、日常雑器である須恵器や土師器、木製、漆の器も大量に出土し、墨書土器もみつかっています。注目されるのは、これらの各種器が一定の規格性を持ち、サイズ（口径や器高等）に互換性をもっていることです。

当時は「律令」という法律を基本とした時代で、それには、身分差を衣服や装身具の色や材質によって示すことなどもかかれていました。それと同様に食事作法も食器の素材・サイズにこの考え方が反映されていたと考えられます。つまり、都では身分の上下が食器の素材・サイズによって表現されていたわけです。六反田遺跡の食器構成からこの作法が反映されていることを読み取ることができます。そのことは、六反田遺跡の土器群＝「都ふうな土器群」と言い換えることができるのです。



◆墨書土器 「長」「大家」「奥家」「郷長」「前井」などは施設や役職を示していると考えられます。墨書が書かれているのは食器、中でも極わずかであることから、食器の配給先を示していると推定できます。つまり、食器を配給の際の覚えが墨で記されたと考えられます。



## 湖に浮かぶ信仰の島

たけしまこてい  
多景島湖底遺跡 (彦根市八坂町地先)

多景島は、彦根市八坂町の湖岸から約5km離れた沖合に浮かぶ、周囲およそ600mの小島です。島には日靖上人が自ら刻んだという高さ約10mの「題目岩」があり、南の斜面には明暦元年(1655)に日靖上人が建立した見塔寺の本堂や鐘撞堂などが並ぶ信仰の島です。また、古くから湖上交通の中継地点や目印としての役割をはたしていたと思われます。

昭和53年(1978)の潜水作業による発掘調査の結果、200枚におよぶ古銭をはじめ、縄文時代から近現代までさまざまな時代の土器や陶磁器類が出土しました。懸仏やミニチュアの鏡など宗教にかかわる遺物のほかに、平安京で使われるタイプの土器が出土していることから、律令的祭祀の場であったと考えられています。また、甕や壺などの日常生活の道具が含まれるので、この島で生活しながら「まつり」や「いのり」の儀式を行っていた可能性があります。

江戸時代には、見塔寺や井伊直孝の供養塔が建てられ、島は信仰の対象として、また、観光地の一つとして多くの人々が訪れることになりました。



中央の栈橋付近が調査地点



湖底に沈む土器





# 馬を運んだ港

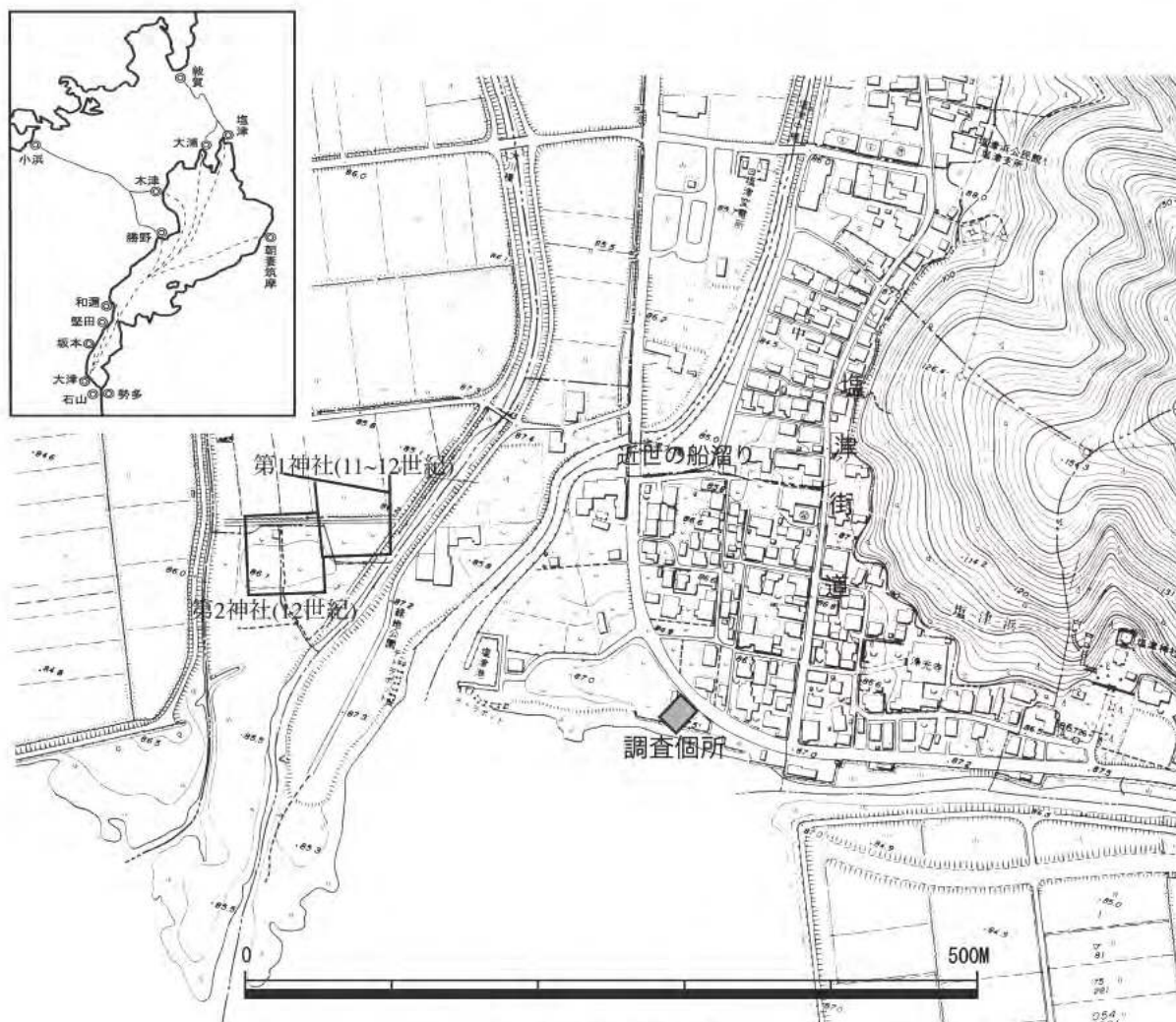
しおつこう  
塩津港遺跡 (長浜市西浅井町)

## 1. 調査の経緯

塩津港遺跡は、長浜市西浅井町塩津浜に所在する古代から近世まで1,000年以上にわたって琵琶湖の水運の要衝であった塩津港に関わる遺跡です。平成18～20年度に大川改修工事に伴って実施した発掘調査では、平安時代後期の神社跡が検出され、5体の神像や約300点の木簡(大型起請札など)が出土しています。

今回の発掘調査は、神社跡の南東約250mの地点で、国道8号塩津バイパス建設工事に伴い実施しました。

発掘調査面積は250㎡で、平成24年5月から10月にかけて調査を行いました。その結果、12世紀に港の施設を拡張したと考えられる大規模な埋め立て造成工事の跡を発見しました。



塩津港遺跡調査地点

## 2. 発掘調査の内容

### (1) 調査成果

現地表面から約2m掘り下げた標高約84mで、琵琶湖岸を埋め立てた平安時代後期の遺構を確認しました。この工事は塩津港の施設を拡張するため琵琶湖を埋め立てて行われたものと考えられます。湖岸の埋め立てに使われた土砂の厚さは、最大約1.5mを測ります。

埋め立て工事は12世紀の前半に始められ、まず、湖底であった陸地側の一角を仕切るように杭を打ち込んでいます。列状に打ち込んだ杭には細い枝を絡め、杭同士を連結させています。杭列の内側には石を敷き並べています。その後あまり時間を置かず、2期工事が始まります。湖側に5mほど前進したところに長さ2m近くある杭を過密に打ち込んで直線的に囲い、内側に大量に石材を投入しています。造成上面は砂と粘土を交互に投入し敷き突き固めています。

このような工事は少なくとも12世紀中に5期に渡って行われており、12世紀の終わり頃には琵琶湖側に約20mほど前進し、ほぼ終了しています。港は短期間に改修・増設を重ね、使われていたことがわかります。



埋め立て造成状況

### (2) 木簡の出土した区画

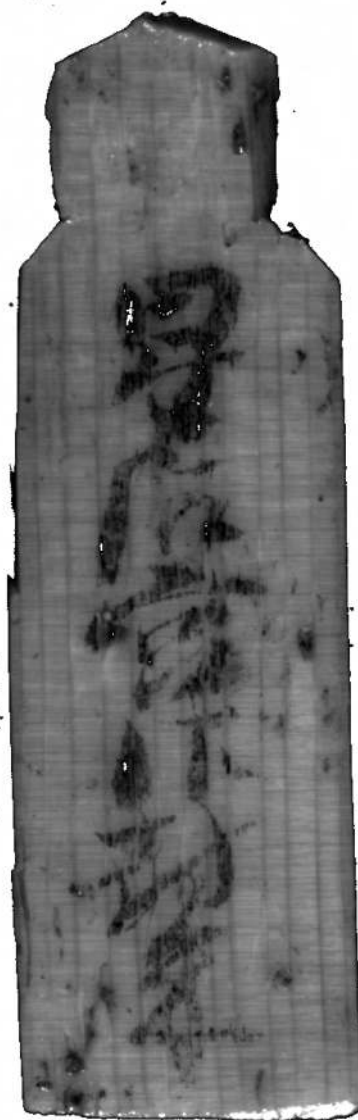
約7m×5mの大きさに仕切られた区画で、12世紀中頃(3期工事)の工事です。当時は琵琶湖に突き出した施設であったと考えられます。周囲は杭を打ち細い枝を絡め、外周に沿って石を大量に投入し、内部は細い枝を敷き詰め、その上に土砂と一緒に当時のゴミを投入しています。そのゴミの中に木簡が含まれていました。

### 3. 木簡

墨書の確認ができる木簡は7点です。このなかで内容の確認ができる木簡は下記の木簡です。



裏



表

だいじゅつこく  
くりげ  
ははつま

代十石

栗毛  
母馬

こうごう  
みんし  
まい

皇后宮御封米

付札木簡（つけふだもっかん） サイズ 78×24×4mm スギ

## (1) 内容

出土した木簡は、付札木簡といいます。付札とは税物などの荷に送り状として付けられた荷札などです。

この付札の表面からは平安時代後期、北陸地方に皇后宮の封戸が置かれていたことがわかります。その封戸から皇后宮への貢納物に付けられた木簡です。裏面には「代十石 栗毛 母馬」と書かれ、封米 10 石の代わりに栗毛の馬 1 頭が納められたこと、馬 1 頭の値が米 10 石に相当していたこと、馬が船に乗せられて京都に輸送されていたことなどがわかります。

## (2) 木簡からわかること

本来、最終の送り地まで付けていなければならない付札が、中間地点である塩津港の一角で出土したのは、ここ（塩津港）で送り側である人が封戸側の皇后宮の役人に荷である栗毛の馬を引き渡したと考えられます。

また、別の見方では、本品上部の切り欠きが、一部欠損しているところから、取り付けが困難になったこの付札を廃棄し、新しいものに取り替えたためとも考えられます。

「封戸」と記された木簡の出土例は初めてです。文献史料でしかわからなかった封戸からの物納制が木簡で出土し、中世成立期の貢納のありかたを検討する上で貴重な資料といえます。

## 4. まとめ

塩津港は、琵琶湖の最北端にある港です。古代以来、北陸方面からの陸路と琵琶湖の水運が結節する港として重要な役割を果たしてきました。若狭国を除く北陸諸国の物資は、海路を使い敦賀で上陸し、敦賀からの峠道である塩津街道を通過して塩津に至り、ここから船に積まれて湖上を南下して、大津を経て都へと運ばれました。

平安時代の『延喜式』巻 26 主税上の「諸国運漕雑物功賃」には、若狭を除く北陸 6 国（越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡）の税物を敦賀で陸揚げして塩津に運ぶ駄賃と、塩津から大津への船賃が定められ、治暦元年（1065 年）9 月の太政官符写（壬生家文書）には、京への調物に塩津で通行料を取ることを禁じる記載があるなど、都と地方を結ぶ要衝の港として公的な役割を担っていたことがうかがえます。なお、同遺跡の神社跡からは水運業者が奉納したと考えられる大型起請札が大量に出土しています。

### ・用語解説

皇后宮（こうごうぐう）：天皇の后に関する役所。

封戸（ふこ）：律令制で貴族（封主）に与えられた戸。封戸から封主に米などを貢納した。

封米（ふうまい）：封戸が所在する諸国国衙から封主のもとに貢納する米。

平安時代前期頃より米に代わる多様な物資を代納した。後期には、国衙を通さず封戸から封主へ直接貢納されることが多くなった。



# まつり! マツリ! 祭祀 水に願いを込めて

かみごてん  
上御殿遺跡 (高島市安曇川町三尾里)

上御殿遺跡では鴨川広域基幹河川改修事業（青井川）に伴う発掘調査を平成20年度から実施しています。これまで、古墳時代前期から後期にかけての集落や奈良時代から平安時代初めにかけての建物や倉庫群などがみつかっています。

今年度は5,000 m<sup>2</sup>を対象に、新たに古墳時代から平安時代までの長い間流れていた川跡がみつかりました。古墳時代の川跡は幅15m・深さ2.2mで、奈良・平安時代には幅4m・深さ2.2mと川幅が縮小しています。奈良・平安時代の川跡からは、人形代や斎串などの祭祀遺物が出土し、水辺の祭祀が行われていることがわかりました。今回、新たに土器や木器と一緒に古墳時代前期の腕輪形石製品（うでわがたせきせいひん）のひとつである石釧（いしくしろ）が出土しました。

石釧は貝製の腕輪を祖形として作られたもので、前方後円墳といった首長墓などの古墳の副葬品や福岡県沖ノ島など祭祀場でも使用されており、宝器・儀器的性格が強く、畿内政権とのかかわりの深い遺物といえます。これまで、県内では草津市から野洲市かけての湖南地域の古墳や集落から集中して出土しており、高島市域で初めて出土しました。上御殿遺跡での出土で8遺跡15例目となります。

上御殿遺跡は、畿内地域と北陸地域をつなぐ交通の要衝で、当時の集落は畿内地域や北陸地域と強い関わりを持ち、集落内の有力者が入手したと考えられます。水辺の祭祀に用いられた可能性も考えられる石釧が出土したこの川は、古墳時代から平安時代に至るまで連綿と水辺の祭祀が行われるなど、この地域では極めて重要な場所であったといえます。

## 上御殿遺跡出土の石釧

大きさ：直径8cm（外側：内側は直径6.6cm）・高さ2.4cm（残存全体の1/4）

石材：緑色凝灰岩

特徴：外面の装飾は3段にわかれ、上段と下段の斜面には刻みが施されています。この刻みは上面および下面から見ると、放射状に見えます。



第100回滋賀県埋蔵文化財センター研究会 -平成24年度滋賀県発掘調査成果報告会-

# 土の中から歴史が見える12

-最新の発掘成果から-

平成24年度に県内で行われた発掘調査のうち、  
注目を集めた調査成果を資料と画像で紹介します。

日時：平成25年（2013年）3月9日（土）  
9時30分～16時30分（受付9時開場）

会場：コラボしが21 3階大会議室

参加：無料 先着120名にガイドブック

『平清盛とその時代』を進呈します。

お問い合わせ：滋賀県埋蔵文化財センター

TEL 077-548-9681

大津市打出浜2番1号  
京阪電鉄「石場」駅より徒歩5分  
JR「膳所」駅より徒歩15分  
JR「大津」駅より京阪・近江バス  
湖岸線 乗車7分 商工会議所下車

滋賀県埋蔵文化財センター

検索

## 日 程

- 9時00分 (受付)
- 9時30分～9時35分 (開会の挨拶)
- 9時35分～9時45分 『平清盛とその時代』刊行のお知らせ
- 9時45分～10時20分 野洲市上永原城遺跡
- 10時20分～10時55分 甲賀市水口岡山城遺跡
- 10時55分～11時30分 大津市近江国府跡・菅池遺跡
- 11時30分～12時05分 長浜市塩津港遺跡
- 12時05分～13時00分 (昼食)
- 13時00分～13時35分 高島市上御殿遺跡
- 13時35分～14時10分 草津市中沢遺跡
- 14時10分～14時45分 栗東市蜂屋遺跡
- 14時45分～15時00分 (休憩)
- 15時00分～15時35分 栗東市南平古墳群
- 15時35分～16時10分 守山市松塚遺跡
- 16時10分～16時20分 (今後のイベント情報)
- 16時20分～16時30分 (閉会の挨拶)



コラボしが21



滋賀県教育委員会 滋賀県埋蔵文化財センター